

従来の議論の塗り直しにとどまっている。

いずれにせよ、中央から発せられる商品やイメージの浸透は新たな現象であると同時に、無視できないほど人々の生活に密着している。その点に注目したことで本書は、ミルズの意図かどうかは別にして、タイ社会の動態性を理解する足がかりを提示している。今後は、移動労働によってもたらされる財やモノを、各地域の、どういった人々が、当該地域の文脈においてどのように捉え、日々の生活のなかに取り込んでいくのかという点こそ明確にしなければならない。本書の議論を足がかりとして、本書を批判的に継承した新たな研究の展開を望みたい。

引用文献

平井京之介. 2001. 「北タイ女性工場労働者とタン・サマイ言説—「近代性」への民族誌的アプローチ」『国立民族学博物館研究報告』26(2): 237-257.

Mills, Mary Beth. 1993. "We Are Not Like Our Mothers": *Migrants, Modernity, and Identity in Northeast Thailand*. Ph. D. Dissertation. Berkeley: University of California Press.

(木曾恵子, 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

Ralph H. Magnus and Eden Naby.
Afghanistan: Mullah, Marx, and Mujahid.
Colorado and Oxford: Westview Press,
2000, 286p.

2001年9月11日の同時多発テロ以前、アフガニスタンは「忘れ去られた国」であっ

た。しかし、あの日を境に、一躍世界の注目を集めることとなった。日本でも、アフガニスタン、あるいはより広くイスラーム世界の動向についての情報が求められるようになった。当初は、テレビや週刊誌において、基本的な事実誤認、あるいは自論に引きつけるための強引な議論が幅を利かせていたが、次第に問題をより深く認識するための契機となる論集が、地域研究者によって刊行されるようになったことは、歓迎すべきことである(たとえば、[広瀬・堀本 2002; 板垣 2002])。

映画「カンダハール」に対する注目からもわかるように、「未知の国」であるアフガニスタンへの関心は高い。しかしながら、実際のアフガニスタン研究は、ほとんど手つかずのままである。9.11以降に発表された論者の多くは、現地体験をもたない研究者によって発表されてきた。「アフガン特需」に乗ったマスメディアや出版業界からの要請に、どちらかと言えば引つ張られる形で、パキスタンや中央アジアといった周辺地域を対象とする研究者が、アフガニスタンに関する「知的真空状態」を埋めるべく作業をしてきたのである。もちろんその努力は真摯なものだが、このような研究が臨時操業的なものであることは否定しようがない。報道が一段落した現在こそ、地道な基礎研究が求められているのではないだろうか。地域研究にとって、アフガニスタンが「空爆の前後のみの存在」となってしまっただけではない。

ここで紹介する *Afghanistan: Mullah, Marx, and Mujahid* は、地理や民族関係にも触れながら近現代史をコンパクトに記述しており、

格好の現代アフガニスタンの入門書となっている。著者の2人は、1960、70年代にアフガニスタンを調査しており、その経験を生かしてバランスのとれた記述を心がけている。この本が良心的だと思われるのは、2000年という刊行時期にもかかわらず、ターリバーンを謳い文句にしていないことである（当時は、一種の産業のようにターリバーン本が出版されていた）。もちろんターリバーンに関する記述もあるが、評価すべき点をきちんと評価したうえで、アフガニスタン近現代史の中で相対的な位置づけを与えようとする姿勢がみえる。この姿勢は、半世紀近くにわたるアフガニスタンとのつきあいから生まれたものと推察される。ソビエト侵攻以前の、アフガニスタンが平和だった時代を実地に知る人間の視点が、たいへん貴重であることが理解される。

以下に、本書の内容を要約するが、冒頭に述べた通り、アフガニスタンに関しては、まさに基本的な情報が欠落する状態で議論が行われている。また本書には、全体を通底する理論的な枠組みもないことから（しかしそのヒントとなるものは、後述するように散見される）、なるべく具体的に内容を追っていくこととしたい。

第1章「イントロダクション」は、アフガニスタンの地理や民族に関する簡単な紹介である。地図を見て、まず目につく特徴は、面積 652,225 km²、日本の約 1.7 倍の国土が、ヒンドークシュ山脈によって二分されていることである。逆に言えば、6~7,000 m 級の山々がそびえたつヒンドークシュという

自然の大障壁が、国境を形成していないという「不自然さ」が、アフガニスタンに不安定な民族状況をもたらしている。この点に関しては、やはり 1960 年代にアフガニスタンで調査した応地利明氏が、以下のように指摘している。

「もともとヒンドークシュとは「インド人殺し」という意味であり、歴史的にはそれがインド世界の北西の境界であった。イギリスは、その境界を同山脈の彼方のアムダリアにまで進出させる。その結果、歴史的世界を異にしてきた北部と南部の諸民族が、人工的な緩衝国家の下で一つの「クニ」とならざるを得なかった。その意味で、アフガニスタンの国家としてのまとまりのなさは、イギリスの残した遺産なのである」[応地 2002]。

ヒンドークシュの南部にあって、この国最大の民族集団を形成しているのがパシュトゥーン人、すなわちアフガン人である。アフガニスタンの人口統計の信頼度は低く、正確な人口を知ることは難しいが、本書ではパシュトゥーン人の人口を 1970 年代において約 650 万と推定している。これは当時の総人口 1,400 万人のほぼ半数にあたることになる（国連統計資料の 1998 年推計によると 1,880 万人であるが、1997 年推計で 2,213 万人という数字もある）。パシュトゥーン人は、カンダハールを基盤とするドゥッラーニー族と、ナンガハールとパクティヤを基盤とするギルザイ族にほぼ二分される。この 2 大勢力は、18 世紀以来、アフガニスタンの政治権力をめぐって抗争を続けてきた。一方、北部にはタジク人やウズベク人をはじめとするダリー

語を話す民族集団が分布する。このグループには、キズイルバーシュやハザーラ人も含まれる。

パシュトゥーン人の多くは、母語であるパシュトー語に加えてダリー語も第2言語として習得する。これ対して、非パシュトゥーン人にとってパシュトー語の習得は難しいという。1964年憲法は、パシュトー語とダリー語の両者を公用語と定めている。しかし国語に関しては、民族間の力関係を反映して、パシュトー語のみとする。実際、2回の短期政権（1929年と1992年にそれぞれ成立）を除いて、近現代史のほぼすべての時期を通して、パシュトゥーン人が政治権力を掌握してきたわけである。その意味で、北部同盟主導の政権構想の行方が、不安定なものとなるであろうことは想像に難くない。

第2章「1973年までのアフガニスタンの歴史」は、歴代王朝の足跡を追う。アフガン人の帝国は、中央アジアのウズベク勢力、イランのサファヴィー朝、そしてインドのムガル帝国の3者が没落していく中で、形成されていった。そして、巧みにジルガ（部族会議）に事を諮りつつ統治を推し進めていったのが、アフマド・シャー・ドゥッラーニー（在位1743-73年）である。「アフガニスタンの父」と称される彼の王朝は、後に政府の教育政策によって「黄金時代」としてのイメージを獲得するにいたった。すなわち、高貴で公正、かつ勇敢な支配者のもと、イスラーム国家が隆盛を誇った時代と認識されているのである。

第3章「地政学一過去と現在」は、アフガ

ニスタンの「危険な隣人」ロシアに焦点をあわせている。アフガニスタンは古の時代より「東西の十字路」であり、隣接地域の影響を大きく受けてきた。領域国家としてのアフガニスタンの形自体も、1893年に画定されたデュアランド・ラインによって整えられたものである（アフガニスタンの独立は1919年）。先に応地氏も指摘しているように、この国境は、アフガニスタンをインドとロシアとの間に立つ緩衝国と位置づけたイギリスによってもたらされたものだった。インドを抱えるイギリスにとって、武力で平定することが不可能なアフガニスタンの安定は、ロシアを牽制するために大きな意味をもっていたのである。しかし、イギリスの後継者アメリカにとって、アフガニスタンはさほどの重要性をもつことは決してなかった。冷戦期の援助合戦は米ソ両国の手によって、アフガニスタンにおいても繰り広げられたが、援助政策を通して次第に影響力を強めたのはソ連だった。開発プログラムの実施を通して、大量の技術者やアドバイザーを送り込んだソ連は、軍や官僚の若手エリート層に食い込んでいった。ソ連の影響力の拡大は、1965年にタラキーとカルマルによって人民民主党 (People's Democratic Party of Afghanistan) が結成されたことによって確固たるものとなっていく。さらに1970年代になると、ソ連の長年の野望である「南進」にとって好都合な地政学的状況が現出する。バングラデシュの独立によってパキスタンが弱体化し、ベトナムを経験したアメリカが外国への関与を控える傾向を示すようになったのである。この局面に

あって、ソ連依存からの脱却を図ろうと、湾岸の産油諸国への接近を図ったダーウッド大統領（在任 1973-78 年）の存在は、次第にソ連には許容しがたいものとなっていった。しかしながら、1978 年 4 月のクーデターによってタラキーが革命評議会議長に、カルマルが副議長に就任した段階では、ソ連もその後の急展開を十分に予想できなかったのである。

まず、経験不足の人民民主党はすぐに内紛を起こし、ハルク派とパルチャム派が決定的な分裂状態を呈する（ハルクは大衆、パルチャムは旗の意）。地方では共産党政権に対する反乱が続発し、新たな徴兵がほぼ不可能な事態に陥る。隣国における共産党の崩壊、ならびにソ連製の軍備で固めた軍隊の敗北という屈辱を回避するために、ソ連には進駐するしか手立てがなかったとも言える。そしてその瞬間に、「緩衝国家」としての半世紀にわたるアフガニスタンの平和は、もろくも崩れ去ったのである。

第 3 章には、ジハードとイスラーム国家の地政学なる節も付け加えられている。そこではまず、イスラーム復興の提唱者であるジャマルッディーン（1838-97 年）が、「アフガーニー」を称した理由が論じられている。すなわち、当時のイスラーム世界において、アフガニスタンは植民地勢力の侵略を阻んだ数少ない国のひとつであり、とりわけ、大英帝国と戦い続けながら独立を守ったことが、宗教的にも重要な意味を帯びていたとする。もちろん、アフガニスタンの周囲を取り巻く情勢は容易なものではなく、当時の国王アブドゥッラフマーン・ハーン（在位 1880-1901

年）が、「イスラームの守護者」としての役割を国外に向けて担うことはなかった。むしろイスラームの大義名分のもと、アブドゥッラフマーンは国土統一のためのジハードに邁進した。その過程で、ヌーリスタンの「カーフィル」の強制改宗やシーア派の弾圧が行われた（ヌーリスタンの諸部族は、独自の宗教を奉じてムスリムに対抗していた。このためムスリム側からは、カーフィル=不信仰者の名前で呼ばれていた）。

このように、内外の文脈がもつれながら、ジハードは具体的な形をとるわけだが、現代の文脈において、それはますます複雑な様相を呈するようになっている。まず、アフガニスタンでのジハードの直接の影響としては、旧ソ連の中央アジアから、何千人もの人間が駆り出され、ロシア人への抵抗を目のあたりにしたことが挙げられる。やがてその影響は、タジキスタンやチェチェンへ波及していくことになるわけだが、イスラーム世界における影響の波及は、必ずしも直線的なものではなかった。OIC (Organization of the Islamic Conference) では、イスラーム諸国がソ連との政治的関係の違いから親ソ対反ソに割れ、足並みをそろえてアフガニスタンでのジハードを支援することにはならなかった。さらにその後の 80 年代には、サウジアラビア（+パキスタン）対イランの対立が、やはり反ソ戦に影を落としたのである。

第 4 章「伝統的アフガン・イスラーム」では、アフガニスタンにおけるイスラームをあつかう。アフガニスタンにもユダヤ人、ヒンドゥー、シクらが存在するが人口的に

は微々たるものであり、宗教はイスラームが卓越している。優勢を誇る宗派は人口の9割を占めるスンナ派であり、これに加えて十二イマーム派ならびにイスマーイール派というシーア派系統の少数派も存在する（シーア派は、民族的にはハザーラ人やキズイルバールに多い）。残念ながら、イスラームに関する記述は、十分にアフガニスタン特有の状況を反映したものとはなっておらず、各宗派に関する概説はステレオタイプの域を出ていない（広い意味でのアフガニスタンの宗教に関する研究では、質量ともに過去の偉大なる遺産である「仏教」が他を凌駕しているという）。そういった物足りなさは残るものの、イスラーム主義者やマルクス主義者と対比させる形で、アフガニスタンにおける伝統的イスラームについて論じようとしており、イスラームをめぐる多様な動向を描き出すための視点としてはある程度評価できよう。

近代教育を一度受容した後に意識的にイスラームへ立ち帰り、政治的変革を志すイスラーム主義者や、反宗教をイデオロギーの一部とするマルクス主義者は、アフガニスタンのここ30～40年の歴史において、重要な役割を果たしてきた。特にイスラーム主義者の場合、地域や民族を超えたアラブ世界とのネットワーク構築を、テロに還元することなく研究していく必要があるだろう。しかしながら、ここで著者が焦点をあてるのは、モッラー（ムッラー）という言葉によって代表される範疇、「伝統的イスラーム」である。農村に根ざしたイスラームは、礼拝や断食に加えて、クルアーン学校での教育、通過儀礼

（誕生、結婚、葬儀）といった形で表現されているが、モッラーはそれらの場においてしばしば主導的な役割を果たす存在である。特にパシュトゥーン人の場合、彼らの卓越したモラルコードであるパシュトスワレイとイスラーム法の共存（あるいは融合）は、モッラーによって担われている。そしてその役割は、中央政府が法を施行できない状況が長期化する中で、地域コミュニティにおいていっそう強化される傾向にあるという。このようなイスラームの根強さを物語るエピソードが、本章には記されている。それは反宗教的なアプローチを展開していた人民民主党政府が、対ムジャーヒディーン戦の苦境をなんとか打開しようと、お抱えのモッラーを用意したというものである（この措置は、ムジャーヒディーンに対するジハードを呼びかけさせるためだった！）。地域コミュニティにおけるモッラーの活動については具体的な記述はないが、今後の研究課題としては重要なものだろう。

第5章「アフガン人の中のマルクス」は、アフガン人マルクス主義者について論じている。先ほど帰国したザーヒル・シャー国王が国を追われたのは1973年であるが、この政変は人民民主党の支持をバックに行われたものだった。それから1992年のナジブッラー政権の崩壊まで、すでに忘れ去られかけているが、20年にわたってマルクス主義者はカーブルを支配していた。第5章は、やがてマルクス主義者を生み出すことになる、知識人養成の起源から説き明かす。それは1903年のハビービヤ・カレッジの設立により開始され

た。当時のアミール、ハビーブッラーの名を冠したこの学校は、英領インドの教育システムに倣ったものであった。そして急速に、同カレッジはアフガニスタンにおける政治変革を求める人々の牙城となっていく。その後のアフガニスタン政治における基本的な図式、すなわち近代化をめぐる王室と知識人との政治的綱引きが、今世紀初頭に確立されていったのである。

王室主導の改革の動きとしては、マフムード・タルズイーが『情報の灯』を発行して、イスラームの改革を訴えた。義父タルズイーの導きに従い、1920年代に性急に近代化の理想を追求したのが、アミール・アマーヌッラーであった。彼は教育、軍事、経済開発などの諸分野で改革を進め、アフガニスタン史上初の憲法を發布した。女性の教育や権利の観点から進歩的と評価される内容だったが、結局、改革主義者と保守派の双方から批判された。改革主義者は、秘密結社を結成して共和制の樹立をもくろみ、保守派は憲法をイスラーム的ではないとしたのである。そして1929年の部族反乱によって、アマーヌッラーは国外への亡命を余儀なくされた。

その後、1953年に首相に就任したダーウード（ザーヒル・シャー国王の従兄弟）は、「赤い皇太子」のあだ名からも理解されるように、リベラルな知識人と多くの点で価値観を共有していた。彼が近代化路線を推進したとき、必要となった援助をもたらしてくれたのは、アメリカよりもむしろソ連であった。国政改革を志向する都市の知識人からマルクス主義者が登場し、プライベートに「学

習会」を立ち上げるのも、やはりこの時期である。それ以降1960年代からのマルクス主義者の動向は、「自由憲法期（1963-73年）」、「権力の共有—第一期共和制」、「幻想の中のマルクス主義者—タラキーとアミンの時代（1978-79年）」、「幻滅を味わうマルクス主義者—カルマルとナジブッラーの時代（1979-89年）」と細かく節に分けて論じられている。この時期について、著者は特に明るいようであり、記述も詳細である。この間の動向は、ソ連の影響力の浸透、雑誌類の刊行、ダーウード支持からその殺害、度重なる人民民主党内部の抗争、さらにはムジャーヒディーンとの果てしない戦いと、まさに一度は知識人を虜にした理想が崩壊へと向かう過程となっている。この間、彼らの主張は決して地域に根ざしたものとはなりえなかったのであり、この点は他地域におけるマルクス主義受容の過程と比較検討してみると面白いかもしれない。

第6章「聖戦士、ムジャーヒディーン、そしてイスラームのための戦い」では、アフガニスタンの歴史的コンテクストにおけるジハードとムジャーヒドの概念を検討したうえで、ムジャーヒディーンを政治組織（政党）、野戦指令官、知識人／行政官の3つのカテゴリーに分類して検討する。この分類には、ムジャーヒディーンを単なる戦場の勇士としてのみとらえる傾向を批判する意図が込められている。

政治組織の多くは、卓越してはいるがしばしば専制的なリーダーのもとに組織されている。ヘズベ・エスラーミーのグルブディ

ン・ヘクマトヤルをその代表格として挙げることができるだろう。また、Jabha-i Najati Milli Afghanistan (National Liberation Front of Afghanistan, NLFA) を統率したムジャーディディは、ナクシュバンディー系スーフィー教団のピール（導師）である。後に彼は臨時政府の初代大統領に選出されている（1989年）。

次に、「聖戦士」のイメージの担い手となった一群の野戦司令官がいる。ヘラートのイスマーイル・ハーン、マザーレ・シャリーフのドスタム、そして「パンシェール渓谷の獅子」マスウードらである。戦場で戦う司令官は政治組織と関係を持ちながらも、独自の存在とみなすことができる。火急の事態に臨機応変に対処するため、独立した軍事・政治的判断をしばしば下すからである。1987年にイスマーイル・ハーンが召集した司令官の会合には、1,200名が集合したとある。現在も地方に割拠する彼らこそが、和平の鍵を握っているといって差し支えないだろう。

1988年に行われた調査によれば、ムジャーディディン関連の出版物は、4言語（ダリー、パシュトー、英語、ウルドゥー）34タイトルのにぼったという。その多くは、もちろん政治組織から発行されていたが、政治指導者や司令官のカテゴリーに入らない独自の知的営為があったことを著者は指摘する。サイヤド・バハーウッディーン・マジュルフ、サハーブッディーン・カシュカーイーらである。前者がパキスタンのペシャーワルに、後者は首都イスラマバードにオフィスを構えて情報提供に努めた。彼らの仕事は、外国人ジャーナリストによらない直接の現地情報

の提供にとどまらず、カーブル＝モスクワとの情報戦という側面をももっていた。

第7章「戦争の向こう側—ポスト冷戦期中央アジアにおけるアフガニスタン」では、より広い地域のコンテクストからアフガニスタンの政治的状況を考察する。アフガニスタンの安定は、国家を構成する民族集団の多くが国境を越えて周辺国にも分布しており、さらに域内イスラーム政治の重要な発信源ともなっているという性格から、中央アジア、南アジア、そして西アジアの問題とならざるを得ないのである。

まず「正当性」が懸案として取り上げられる。1973年のダーウードによる王制廃止以来、カーブルの歴代政権はいずれも十分な正当性を確保するにいたっていないが、この弱点の克服のために次の3点が提案されている。

- (1) 民族や宗派の異なる各地域の条件に配慮した選挙、ならびにすべての集団の武装解除と正規軍の結成
- (2) 臨時政府樹立のためのロヤ・ジルガの召集
- (3) 政府に正当性を付与するための王制の復活

本書執筆当時は、ターリバーンが政権を握り、北部同盟と対峙していたが、これはその膠着状態からの脱出のシナリオとも言えるだろう。ターリバーン政権崩壊後の現在、実際(2)と(3)の方向で事態は進行している。しかし、このことは本書の慧眼と言うよりも、合意形成の意思や手段が欠落していたため、きわめて穏当な解決さえ自力で導けなかったアフガニスタンの内情を示していると考えたほうがよいだろう。事実、(1)に関し

てはきわめて不安定な状況にあることが伝えられている。

またこの章では、ターリバーンの成立の契機からカーブル制圧までを概説している。続く「エピローグ」でも、ターリバーンを中心にここ数年の政治・軍事的経緯を説明している。著者のターリバーンに対する評価は決して積極的なものではないが、彼らに対する批判の多くを「アフガニスタンの状況を見捨てた不当なもの」とみなしている。ターリバーンと言え、政権を握っていた時代から女性への抑圧、特に教育の禁止が非難されてきた。しかし、「20世紀を通して、どんなに状況がよかった時代でも、アフガニスタンの女性の就学率は4パーセント以下であった」(p. 206)。善玉と悪役という図式を乗り越えた問題設定のもとで研究を進める必要があることは明らかである。

さて、冒頭にも述べたように、本書はコンパクトなアフガニスタン入門書として位置づけることができる。巻末の詳細な年表に照らし合わせて読めば、アフガニスタン現代史の大まかな流れをとらえることができるだろう。もちろん実際問題としては、イスラームに関する記述が単純化のそしりを逃れえないなど弱い部分も散見されるし、多くの事象を地政学的に語ることも発展性にとぼしいと言わざるをえない。また著者の研究姿勢がウオッチャー的なものにとどまっているため、地域の文脈から展開して、より大きな問題へ向かうための道筋も示されていない。しかし、周辺地域で進められている興味深い研究と重なる部分がないわけではない。一例を挙

げれば、パキスタンのパシュトゥーン人を対象とする政治人類学は、イスラームにおける政治的リーダーシップに関して、相当の蓄積を有している。これら Fredrik Barth, Akbar S. Ahmed, Charles Lindholm らの先行研究に、ムジャーヒディーンの類型論を絡めて論じていくことが可能だろう（この点については、[子島 1998] を参照していただきたい）。いずれにせよ、当面は、理論的枠組みとの関連を考えつつ、既存の研究の整理作業を行わなくてはならないだろう。

最後に、繰り返しとなるが、アフガニスタン研究を、空爆の前後のみの臨時作業としてはならないと主張したい。もちろん研究が手薄なのはアフガニスタンに限ったことではない。しかし、9.11以降、アフガニスタンは地域研究者にとっても特別な意味をもつ国となったのではないだろうか。アフガニスタン研究の進展が、地域研究の今後を占うことになると考えるのは、筆者だけではないはずである。

引用文献

- 板垣雄三編. 2002. 『「対テロ戦争」とイスラーム世界』岩波新書.
 応地利明. 2002. 「大英帝国の「世界遺産」』『地域研究スペクトラム』8: 27-28.
 子島 進. 1998. 「訳者あとがき」バルト, フレドリック. 『スワート最後の支配者』子島 進 訳. 勁草書房, 303-322.
 広瀬崇子・堀本武功編著. 2002. 『アフガニスタン南西アジア情勢を読み解く』明石書店.
 (子島 進, 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)